

札大「講演」(2023. 11. 7) メモ

以下は2023(令和5)年11月7日(ソ連時代の「革命記念日」)に札大の講演会場で配布したメモ書きである(今回「ファンタジーを読む会」の頁などかなり増補)。すでに廃止が決まっている「ロシア語専攻」の学生らの前で1時間、話をした。直後の質疑応答の場で、藤井一行先生の訳業に触れていないではないか、という質問を受けたが、藤井先生は私が札大に入学した時にはすでに他大学に移られていた。先生がたについては、自分が学生・院生時代にじかに習ったか、同じキャンパス内ですれ違ったかした方々の名前を出した。

この講演会はさらに、札大ロシア語学科卒業生の大島剛(2023. 11. 10)、山崎敏則(2023. 12. 20)、鈴木理奈(2024. 1. 18)の諸氏が「バトン」を回した。詳しくは札幌大学ロシア文化センターHP参照。

なお、あらためて、11月7日の当日、会場に参集されたすべての皆様に感謝申し上げます。なかんずく、関東地方から来札の「水源地」発行人の粕谷隆夫、俳句・漢詩作家の横山峰雲、札幌在住のロシア語学科出身者の小林領子、水尾なみ子、宮崎久、飯田梅子、大島剛、山崎敏則、鈴木理奈、主催者の札幌大学ロシア文化センター代表の山田隆、同大学学術支援課の高松義樹、一以上の諸氏にバリショーエ・スパシーバ(Большое спасибо!!)。

(2024. 3. 29 村野、記)

■札幌大学ロシア文化センター主催：ロシア語学科OBOG連続講演会「日本とロシア——私がこの社会でやってきたこと——」第1回講演(2023. 11. 7, 14:40 開始、札幌大学図書館内) 配布資料(As of Nov. 2, 2023)

クニージニク(本屋)として働いてきた

村野克明(むらの・かつあき)

驚馬だった / 働いた

働いた / 驚馬だった

(堀口大学「自画像」)ⁱ

Закончилась бы поскорее война!

[戦争反対!]

謝辞/学生への助言/大学への要望/「クニージニク」、「～先生」、西暦、OB実名の事。[「大学への要望」とは、ロシア語専攻廃止の大学決定に対してOBの一人として反対であること、その存続を望むと述べたことを指す]

札幌大学外国語学部ロシア語学科7期生。1973(昭48)年4月入学、1977(昭52)年3月卒業。(以下、敬称略)

I. 1970 年代

■「プラハの春」への軍事介入(1968. 8)、大阪万博(1970. 3-9)、三島由紀夫事件(1970. 11)、札幌オリンピック(1972. 2)、沖縄返還(1972. 5)、金大中事件(1973. 8)、ベトナム戦争終結(サイゴン陥落 1975. 5)、デタント(ブレジネフ訪米 1973. 6~1979) (Разрядка международной напряжённости)、ロッキード事件(1976. 7. 27 田中角栄元首相逮捕)。

<札幌大学外国語学部ロシア語学科>

■7 期生 80 名 (2 クラス)、8 期生 120 名。ロシア語研究会。語劇「どん底」「検察官」。
■専任 (東外大=東京外国語学校出身。全員男性)：菱沼圭介、千葉萌一郎、貝沼一郎、深水明美、相馬守胤、渡辺雅司。「教室以外」での交流。コンパ (ご自宅でも)。
■非常勤：内藤操 (内村剛介)、灰谷慶三、小平武、他 (以上北大)。松本忠司 (小樽商科大学)。→『えうゐ』誌 (1975-1997) に結集。■「バレンチナ」先生 Валентина Мацусака。
のちに東京の高田馬場の「寺子屋教室」で、数名の社会人たちと内藤操氏の講義を受けた。S.ブルガーコフ「英雄主義と苦行」(『道標』所収) 原書読解 (Web 版「水源地」創刊号参照)。

<早大院 (露文) 修士課程>

■川崎浹ゼミ。「ロシア・ルネサンス」。『マルクス主義からイデアリズムへ』(S.ブルガーコフ) 原書講読。サハロフ誕生日集会 (渋谷山手教会。原卓也、江川卓、川崎浹、他)。
■専任 (順不同)：川崎浹 (チャーホフ、ロープシン他)、藤沼貴 (トルストイ)、金本源之助 (フォークロア)、新谷敬三郎 (ドストエフスキー)、水野忠夫 (ロシア・アヴァンギャルド)、安井亮平 (ロシア思想、二葉亭四迷)、木村彰一。
■非常勤： 染谷茂 (『イワン・デニーソヴィチの一日』(ソルジェニーツィン) の原文講読)、江川卓、徳永康元、他。

II. 1980 年代 <ナウカ (株) >

■ソ連・アフガン戦争(1979. 12-1989)、モスクワ・オリンピック(1980. 7-8)、ブレジネフ逝去(1982. 11)、アンドロポフ逝去(1984. 2)、チェルネンコ逝去、ゴルバチョフ書記長就任(1985. 3)、チェルノブイリ原発事故(1986. 4. 26)、経済「加速化」、独立採算制、複数候補制、ペレストロイカ路線、グラスノスチ (情報公開)、ベルリンの壁崩壊(1989. 11. 9)、日本のバブル経済(1986. 11-1991. 5)。リクルート事件(1988. 6)、昭和天皇崩御(1989. 1. 7)。

■仕入部外国新聞雑誌係の仕事 (80 年代前半) (入社 1979. 9) :

——主として欧米の定期刊行物が中心。多忙。Jan-Dec, R/N 外注。外価調査など。

■営業部（都内の大学へ直販）の仕事（80年代後半）：

——月刊の欧米書新刊カタログ。バブルのドル減らし受注。公取の調査。ペレストロイカ期の出版物。

■解禁アーカイブズ（ソ連共産党中央委員会文書など）の商品。日本アーカイブズ学会。アーカイブズ学英文原書講読（学習院大学社会人講座に3年間参加。講師は安藤正人氏）。

■労働組合の活動（～2006）

——ナウカ労組「スクラム」ワープロ編集、出版労連（日本出版労働組合連合会）、小売洋販共闘会議（団体交渉、「対角線交渉」、「ニュース」ワープロ作成・発行）、リーダーズダイジェスト、三一書房の争議などへの支援。講談社編集者岩本敬子氏の思い出。

III. 1990年代 <ナウカ（株）>

■阪神・淡路大震災（1995. 1. 17）、オウム真理教地下鉄サリン事件（1995. 3. 20）

■湾岸戦争（1990. 8, 1991. 1-3）、ソ連崩壊（1991. 12）、CIS・ロシア連邦成立、移行経済期、ハイパーインフレ、エリツィン（ロシア連邦初代大統領 1991. 7-1999. 12）。

■ロシア部門での仕事：

——モスクワ、ペテルブルグ、ウラジオストク出張。Bカタログ（隔月刊）編集。ロシア書タイトル訳付（外注→自前）。会社の資金繰りの問題など。

■インターネット普及、欧米書輸入販売業界の衰退・進化。

■「1998年夏以来、西田勝氏は植民地文化研究会の研究者を率いて、10回以上にわたって、中国東北を訪れた」（劉春英「『満州国』時代に刊行された日本語文学資料の保存と整理」より）——このグループ旅行に二度、参加（一度目は旧満州在住の亡命ロシア人詩人・作家が現地で刊行した著作の調査のため）。西田氏とは市ヶ谷の法政大学文学部事務室そばの氏の研究室で知り合った。開けっ放しとなった扉の所に雑誌「社会文学」が山積みとなっていて好奇心から顔を覗かせたのが始まりだった。その後、私としては第一回目の「満州」旅行で西田氏らがどのように大連図書館で日本語資料の複写をしているのかを実見した。第二回目は、哈爾濱（ハルビン）、佳木斯（ジャムス）、綏芬河（スイフンガ＝ロシア語で「国境の駅」Пограничная）まで行動を共にし、私はそこから別行動で国境を越え、ウラジオストクへと渡った。西田氏らは白頭山の中国側へと向かった。この旅行では、哈爾濱で「七三一部隊」の本拠地の跡（博物館となっていた）を見学、松花江（スンガリ）を私は初めて見て、思ったより大きいのに驚いた（ハルビン学院はルートに含まれていなかった）。佳木斯では畑の中に止まった貸し切りバスの中で小川津根子氏（岩波新書『祖国よ：「中国残留婦人」の半世紀』の著者）が眼前のその場所がかつて開墾に励んでいた「満蒙開拓団」の説明をした。その後、バスは移動し、佳木斯内の長谷川テル（筆名・緑川英子。

日中戦争時に中国から日本に向けて反戦を訴えた) と夫の劉仁の眠る墓所を訪ねた。

IV. 2000 年代

■米国同時多発テロ (2001. 9. 11)。イラク戦争(2003-2011)。プーチン政権の発足・継続 (2000-)。チェチェン戦争(1999. 8-2009. 4)。

■ナウカ (株) 倒産 (2006. 7)。

■ナウカ・ジャパン合同会社での仕事(2007. 4-)。

ロシア書月刊カタログ(<Литера>)のために新刊本の書名の和訳作業。Book News 作成。

■ナウカ倒産後、数名の方々と共にロシアの歴史ものの共同翻訳の仕事をしたが、版元の「準倒産」のため、原稿だけが手元に残り、一銭も入らなかった (2024. 3. 29 現在も同様)。

V. 2010 年代

■東日本大震災 (2011. 3. 1)。東京電力福島原子力発電所事故。

■翻訳の仕事:

『ジャポニズムのロシア』(モロジャコフ、藤原書店、2011. 6)。

『富士山に登った外国人』(共訳、露蘭堂、2012. 11) (拙訳「文明の揺籃の地から」クラスノフ)。

「ロシアと日本 ―紛争の時代における協力 1905-1945」(『環』Vol. 52、2013年1月、藤原書店、所収)。

『原子力砕氷船レーニン』(ブリノフ、共訳、成山堂書店、2015. 9)。

『東京を愛したスパイたち 1907-1985』(クラーノフ、藤原書店、2017. 1)。

■「ハルビンの『ナウカ』覚書」(ナウカ労組文集「私たちの仕事・職場・組合」別冊(資料編)に所収、2010. 1)。【「ハルビン」「満州」にゆかりのある先生方 → 菱沼、深水、バレンチナ、内藤の諸氏】

■「大竹博吉 略歴と資料」(『日露異色の群像 30』ⁱⁱに所収、東洋書店、2014. 4)。

■「出版ニュース」誌上旬号の「海外出版レポート ロシア」欄への寄稿。

■シビル市民講座「加納実紀代さんと読むアレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』」(全3回、2017年9~12月)(資料調査・収集など、ロシアフェミニズム専門家の高柳聡子氏が全面協力)。civiltachikawa.sakura.ne.jp/shimin-koza-n30.html

VI. 2020 年代

■コロナウイルス COVID-19 感染拡大(2020.1-)、安倍晋三銃撃事件(2022.7.8)、「統一教会」問題、ロシア連邦軍「特別軍事作戦」(ウクライナ戦争)(2022.2.14-)、ナゴルノ・カラバフ紛争(2023.9)、イスラエル・パレスチナ紛争(2023.10-)、自民党裏金問題。

■ブログ「談話室=水源地」への寄稿(世相雑感、読書感想文など)(2019秋~)。

■Web版「水源地」誌ⁱⁱⁱへの翻訳(下線)などの寄稿(2016.12-2023.10)：

I号(2016.12)：「内村剛介」、「内戦」(ヴォローシン)。

II号(2020.9.1)：「その年の秋」(村野宏子)、「アゴーヴナ」(ヴァルデンガ)。

III号(2022.2.1)：「ひろこボケ日記(二)」(村野宏子)、「『二十四の瞳』覚書」、「日本正教会史の新アーカイブ資料について」(バスストレミヤンナヤ)。

IV号(2023.2.1)：「新宿コーシカ雑記」、「コーシカ夜話」(セミョーフ)、「骨面上の反戦史」(クラーノフ)。

V号(2023.10.16)：「手記(抄)」(ギンズブルグ)、「オランダイチゴに接吻」(ヴァルデンガ)、「よい子」(ズドルニク)。

VI号(2024.4.10)：「ツァーリ権力の瓦解(上)」(コロレンコ)。「札大「講演」メモ」、「札大「講演」レジュメ」。

■「水源地」HP特別寄稿欄への翻訳の寄稿：

「コロレンコのゴーリキー宛書簡 1921.8.9 付」(コロレンコ)(最初「名田島お茶の間通信 せせらぎ」第9号に掲載。2023.2.1)

「五番目のB(ベー)」(ブイコフ)(バルペーロワ論)。

■「名田島お茶の間通信 せせらぎ」への寄稿(母宏子の文章など)：

(本誌は札大図書館、国立国会図書館に勤務した福島みゆき氏の個人雑誌。創刊2017.4.1)

第3号(2017.10.1) 「『戦争は女の顔をしていない』を紹介する」。

第4号(2018.3.3) 「『戦争は女の顔をしていない』を紹介する」(承前)。

第5号(2018.9.10) 「村芝居」(村野宏子)。

第6号(2019.4.1) 「友に代わりて青空を見る」(村野宏子)、「村野克明さんのおたよりから」、「廉子覚書(其の一)」(井出廉子)。

第7号(2020.4.10) 「本を紹介します」(『四つの風 砂澤ビッキの創作世界』)、「牛に追っかけられた話 他」(村野宏子)、「竹中 起きな！」(村野宏子)。

第8号(2021.4.20) 「お月さま三題」、「小品四編」(ズドリク)、「アゴーヴナ」(ヴァルデンガ)、「ひろこボケ日記(一)」(村野宏子)、「その年の秋」(村野宏子)。

第9号(2023.2.1) 「コロレンコのゴーリキー宛書簡 1921.8.9 付」。

■シビル立川館内「ファンタジーを読む会」(講師きどのりこ氏)に参加：

第31期(2019.4-9) 「番外編 児童文学で読む中国・朝鮮と日本」

「バイバイ。」李 慶子 (アートン) / 「風の海峡」吉橋通夫 (全2巻 講談社) / 「生きる—劉連仁の物語」森越智子 (童心社) / 「半分のふるさと」イ・サンクム (福音館) / 「二つの国の物語」赤木由子 (3部作 理論社)。

第32期 (2019.11-2020.3) 「小人のファンタジー」

「木かげの家の小人たち」いぬいとみこ (福音館) / 「だれも知らない小さな国」佐藤さとる (講談社/青い鳥文庫) / 「床下の小人たち」メアリー・ノートン (岩波/岩波少年文庫) / 「ニルスのふしぎな旅」ラーゲルレーブ (福音館ほか) / 「ホビットの冒険」トールキン(岩波/岩波少年文庫)

第33期 (2020.4-10) 「小人のファンタジー (続)」

「野生のロボット」ピーター・ブラウン (福音館) / 「カゲロボ」木皿 泉 (新潮社) / 「ボーン・ロボット」森川成美 (偕成社) / 「かんづめぼうやコンラート」ネストリングー (福音館) / 幼年童話の中のロボット 「ロボット・カミイ」古田足日(福音館)、
「大どろぼうジャム・パン」内田麟太郎(文研出版) 他。

第34期 (2020.11-2021.3) 「最近のファンタジー作品を読む」

「青い月の石」トンケ・ドラフト (岩波少年文庫) / 「エミリーとはてしない国」ケイト・ソーンダズ (ポプラ社) / 「月のケーキ」ジョーン・エイキン (東京創元社) / 「ソレルとおどろきの種」ニコラ・スキナー (ハーパーコリンズ・ジャパン) / 「ブライアーヒルの秘密の馬」メガン・シェパード(小峰書店)。

第35期 (2021.4-9) 「ロアルド・ダールの作品を読む」

「おばけ桃の冒険」「魔女がいっぱい」(評論社) / 「チョコレート工場の秘密」「ガラスのエレベーター宇宙にとびだす」(評論社) / 「マチルダは小さな天才」「オ・ヤサシ巨人BFG」(評論社) / 「ぼくのつくった魔法のくすり」「いじわる夫婦が消えちゃった」(評論社) / 「魔法のゆび」「ヘンリー・シュガーのわくわくする話」(評論社)。

第36期 (2021.11-2022.3) 「タイム・ファンタジーを読む」

「とぶ船」ヒルダ・ルイス (岩波書店)「タイム・マシン」H・G・ウェルズ / 「時の旅人」アリソン・アトリー (岩波書店、評論社) / 「屋根裏の遠い旅」那須正幹 (偕成社) / 「とざされた時間のかなた」ロイス・ダンカン (評論社) / 「未知の来訪者」J・R・タウンゼント (岩波書店)。

第37期 (2022.4-9) 「動物たちのファンタジー」

「せむしの小馬」P・エルショフ 田辺佐保子訳 (論創社) (「イワンとふしぎなこうま」(岩波少年文庫)) / 「ドリトル先生航海記」ロフティング 井伏鱒二訳 (岩波少年文庫) / 「鹿の王」上橋菜穂子 (KADOKAWA、角川文庫) / 「おおやさんはねこ」三木卓 (福音館文庫) / 「ウォーターシップダウンのうさぎたち」リチャード・アダムス 神宮輝夫訳 (評論社)。

第38期 (2022.11-2023.3) 「韓国の作品を読む」

「世界でいちばん弱い妖怪」キム・ドンシク 吉川風訳 (小学館) / 「ペイント」イ・ヒ

ヨン 小山内園子訳 (イースト・プレス) / 「ネギをうえた人」朝鮮民話集 金素雲編 (岩波少年文庫) / 「アーモンド」ソン・ウォンピョン 矢島暁子訳 (祥伝社) / 「カステラ」パク・ミンギョ ヒョン・ジェフン/斎藤真理子訳 (クレイン)。

- 「生きる 井出廉子・村野宏子文集」(2020 初版、2021 増訂第 2 版) (村野克明編集)。
- 「大竹博吉、大竹せい 著作・翻訳目録 附・関連文献一覧」発行(2023. 7. 27)。後出。

卒業生の活躍

同級生では、宮崎久氏は道庁と民間の漁業団体の時代を通して通算 9 回ほどモスクワで日ソ(日ロ)漁業交渉に従事、ほかに(ロシア語の世界ではないが)ポーランドで何十年も日ポ文化交流事業を牽引した人、道内で長くソ連・ロシア相手の木材貿易に携わった人、東京などで対ソ・対ロ貿易で活躍した人が数名に上る。

一期生(1971 年 3 月卒)の山谷賢量氏は北海道新聞社で、ペレストロイカ(Перестройка)とソ連崩壊(Распад СССР)直後の時代に、モスクワ特派員として活躍(1 回目は 1987 年 3 月～1990 年 3 月初め、2 回目は 1993 年 3 月～95 年 3 月)。その後、東京で著名な弁護士らと共に「一票の格差是正」の選挙制度改革運動に参加、SNS で活発な意見交換を展開している。

三期生の美水正一氏は東京の商社マンとして三度モスクワに駐在(通算 8 年 6 ヶ月)。その他、旧ソ連各地への出張が延べ 121 回に上る(全 1430 日)^{iv}。詳しくは脚注参照。近年、かなりの分量の回想録を上梓(私家版、分冊形式)。

今の私のアルバイト先の「ナウカ・ジャパン合同会社」のライバルの(株)「日ソ」(旧称「日ソ図書」(株))前社長も現社長も札大ロシア語学科卒。

ロシア語の教職の部門では、本日の会の進行係のロシア文化センター代表の山田隆氏(六期生)から始まって、今回の講演会の掉尾を飾る鈴木理奈氏に至るまで、かなりの人数に上る。【「ロシア(語)」以外の分野ではもっと多く活躍】

相馬先生の記述

ロシア語学科の卒業生の活躍に関しては相馬守胤(もりたね)先生の文章がある。今、この会場で回覧中の『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』^vという本で、相馬先生は、1967 年創設時から 2000 年 4 月現在までのロシア語学科 37 年間の概括をし、以下の文章で締めくくっている(1976 年度と 1997 年度のカリキュラム=専攻課程科目表をも掲示)。

——「主要出身者については、開学後いまだ 30 年と歴史が浅く、著名人の輩出は今後に期待される場所である。すでに新聞記者としてソ連、ロシアで活躍し、現在は論説委員をしている者、CIS 加盟国で大使館勤務をしている者、ロシア連邦内で日本語教師をしている者、通訳案内業の国家試験に合格した者、道庁、支庁、地方の市役所などで日露漁業関係や北方領土関係の業務についている者など、さまざまである。また、大学院に進学した

者は、学内ではロシア語学科卒業生に最も多く、現在 6 名の卒業生が国公立の大学で教壇に立っている。」

札幌大学専任の三先生の主な翻訳書：

- 貝沼一郎： S.T. アクサーコフ『釣魚雑筆』（響文社、1986／岩波文庫、1989、1990）、『幼年時代』（人力社、1993）。
- 相馬守胤： サルトィコフ＝シチェドリシ『国外にて』（「シチェドリシ選集」第 3 巻、未来社、1983）、『僻地の旧習（上）（下）』（共訳、同「選集」第 4、5 巻、1984）
- 渡辺雅司： レフ・メーチニコフ： 『亡命ロシア人の見た明治維新』（講談社学術文庫、1982）、『回想の明治維新』（岩波文庫、1982、1987）。他に、チャーホフ『サハリン島』（NHK ラジオ講座「まいにちロシア語 応用編」2004、2006、東外大本郷サテライト「ロシア語中級」2018）、オドーエフスキー『ロシアの夜』（東外大本郷サテライト「原典で読むロシア思想史」2017-2018）、ケドロフ『星の書物 東方的・詩的宇宙のビジョン』（共訳、岩波書店、1994）、ロートマン『ロシア貴族』（共訳、筑摩書房、1997）。

大竹博吉（1890～1958）

大竹博吉とは 1890 年に岡崎市に生まれ、1958 年に東京で逝去した人で、1932 年に第一次ナウカ社を東京の神田神保町に設立し、ソ連の国際図書公団(Всесоюзное объединение <Международная книга>) (略称メジクニーガ) と契約を結び、ここからロシア語出版物（新聞・雑誌も含む）を輸入し、日本国内の法人（大学など）、個人の顧客に販売したクニージニク（本屋）である。上記の札大の先生方の中には、若い頃、神田神保町のナウカ書店でロシア語書籍を購入した、という思い出話を語った方々もおられた（当時の東京外国語学校はナウカ書店から歩いてすぐの距離にあった）。

この事業をスタートさせた時、大竹自身は 40 歳を越えていた。それまで何をやっていたかと言えば、1911 年からの 10 年間は「東京日日新聞」などの新聞記者だった。1917 年のロシア革命（昔のソ連時代では本日 11/7 は「十月社会主義大革命」記念日）のあと 19 年にウラジオストクに渡り、国立極東大学の聴講生として 2 年間ほど現地でロシア語などの勉強をしつつ、新聞記者としての活動をしていた。シベリアでの赤軍 VS 白軍の内戦の状況、それに乗じてウラジオストクに上陸した日本、米国などの外国干渉軍の行動などに関する記事を、日本本国の新聞社の本社に送っていた。

1922 年 1 月からは、日本の外務省の肝入りで作られた東方通信社のウラジオストク支社に勤務、その後、23 年 3 月に同通信社のモスクワ特派員として訪ソし、25 年秋までの 2 年半ほどの間、モスクワから日本の外務省に詳細な報告を送っていた。

しかし、大竹は、帰国後の 1927 年になると東方通信社を退社し、翌 28 年に「ロシア問題研究所」を設立した。この時が彼自身の一大転機であり、ここを拠点として、出版事業とソ連ウオッチャーの評論執筆活動とに乗り出した。

大竹の、「ロシア語からの翻訳」の仕事をも含む「出版への志」は生涯を貫いており、第1次ナウカ社では、かなりユニークな書籍（多くの翻訳書を含む）と、「文学評論」、「社会評論」という雑誌とを発行した。即ち、日本語書籍の出版社（издательство）とソ連図書（多くはロシア語書籍）を輸入し販売する書店（книжный магазин）という「二刀流」のクニージニク＝本屋だった。

しかし、日本では1920年代から30年代前半にかけて英・独・ロ語などからのマルクス主義関連の翻訳書と、日本人著者によるその種の著作との出版が大流行し、第1次ナウカ社もご多分に漏れず、そうした類いの図書の刊行にも力を入れた。その結果、社主の大竹は、当時の官憲（警視庁の特高第一課と外事課と）から睨まれ、1936（昭和11）年の「二・二六事件」のあとの同年7月末、「軍機保護法違反」の容疑で逮捕され、翌々年の39年2月の東京地方裁判所の判決では「治安維持法違反」で「有罪」となった。同年11月の控訴審でもそれは覆されなかった。結局、大竹の出獄は、最初の拘束から5年半ほどの歳月が流れた1942年（昭和17年）2月のことで、すでに太平洋戦争が始まっていた。

第1次ナウカ社が存続したのは、登記上は1932年4月（神田神保町に事務所を設けたのは前年9月）のオープンから36年7月末までの4年3ヶ月ほどの短い期間だったが、検閲、発禁措置など厳しい条件下、精一杯の活動を展開した。

出版物では、『マルクス・エンゲルス二巻選集』、ショーロホフ『開かれた処女地』全2巻、三好十郎『斬られの仙太』（戯曲集）、『ゴオゴリ全集』全6巻、『露西亜帝国満州侵略史』、島木健作『獄』、『列強対満工作史』全2巻、『小林多喜二全集』全3巻＋書簡集＋日記、本庄睦男『白い壁』、『中野重治詩集』、『プーシキン詩抄』などがある。

戦後の大竹は1945年（昭和20年）10月末に第2次ナウカ社を設立、1951年12月までの6年間ほど存続した。日本全体がソ連との貿易が始まってもない時期だったので、ソ連図書の輸入はできず、もっぱら、出版活動のみに専念した。その出版物の内容からみて、焼け跡の広がる敗戦直後の民主主義陣営の一翼を担う出版活動を展開したと言える。

1952年9月、第3次ナウカ社（「ナウカ株式会社」）を大竹は設立、引き続き教科書など出版活動も続けたが、とくにソ連からのロシア語書籍の輸入とその販売に力を入れた。この会社は2006年7月に破産するまでの54年間、存続した。大竹自身はその設立（1952年9月）から5年3ヶ月ほど経って他界した（1958年1月）。

大竹せい（1891～1971）

せい（旧姓清水）は市川房枝の盟友で戦前の婦人参政権運動の幹部の一人だった。子どもの頃、長野県の養蚕業などの担当課長だった父親が自死、その4年後には姉と祖母が県下の井上村で殺人事件に巻き込まれ、関東大震災では母親と弟が犠牲となった。しかし、若い頃の「女性日本人」誌の編集後記などからは、機知に富み、周囲を楽しませる陽気さが伺われる。ペンの仕事は、日本女子大学卒業後に、徳富蘇峰の「国民新聞」社に入り、そこの女性記者から始まった。大竹博吉と結婚後、ウラジオストク、モスクワ滞在中にロ

シア語を勉強し、帰国後に、翻訳を雑誌に載せるまでになった。市川房枝が発行人の雑誌「婦選」（のち「婦人展望」）誌上の座談会などにかかなりの頻度で参加。若い頃から断髪、洋装で通した。昭和前期の第1次ナウカ社の神保町店では店頭にも立った（戦後のことは別途口述）。

『大竹博吉、大竹せい 著作・翻訳目録 附・関連文献一覧』

編集：宮本立江、村野克明。発行：「大竹博吉、大竹せい著作目録刊行委員会」、2023年7月27日刊行。全103頁。二段組。A4判。

——「大竹博吉 著作・翻訳一覧」、5-37頁。全447項。付記(1)：①東方通信社「モスクワ通信」（アジア歴史資料センターHPで閲覧可）。②葉書・書簡類。ミチューリン運動関係、せい夫人宛て（1931年モスクワから）。付記(2)：不確定・未確認の資料群：①『文学評論』の「ナウカ社たより」。②朱筆入りゲラ刷り原稿3点。他。付記(3)：外務省委託の幻の「日露交渉史」（東京大空襲で原稿消滅）。その他。

——「大竹博吉 関連文献一覧」、38-78頁。全362項。

——「大竹せい 著作・翻訳一覧」、79-89頁。全167項。付記：せい執筆の可能性のあるもの10点、ほか。

——「大竹せい 関連文献一覧」、90-99頁。全39項。付記：①スパルヴィンから大竹せい宛葉書2枚。②スパルヴィンから大竹せい宛て献呈の『横眼で見た日本』の献辞。③「信濃毎日新聞」記事：1900.4.11（東京の旅人宿相模屋窃盗事件）、1900.10.16（10.11 清水三男熊四課長自死）、1904.1.10（1.8 井上村二人斬り事件）、1904.1.11（井上村惨殺余聞）。

——「大竹博吉年譜」「大竹せい年譜」：100-102頁。

——「あとがき」2023年5月付（署名）宮本立江、村野克明。

★紹介記事：「日本古書通信」2023年9月号「受贈書目」欄。／「日本とユーラシア」第1556号（発行：日本ユーラシア協会、2023年10月15日付）、第6面「書評」欄。

★★2023年11月11日（土）15時「桑野塾」（早大戸山キャンパス33号館2F）で本目録について宮本立江氏が講演。<https://deracine.fool.jp/kuwanojuku/index.htm> 参照。

注

i 堀口大蔵（1892-1981）「自画像」。

【出典】『水かがみ』（随想、詩、短歌、座談会）（昭和出版、1977年6月20日初版発行）の「自選詩篇」。

【初出】『夕の虹』（詩集）（昭森社、昭和32（1957）年7月）。

「驚馬」＝ ①おそい馬。（対義語）駿馬（しゅんめ）「——に劣る〔ヘボン〕。②才能の劣っている者。「——に鞭（ムチウ）・つ」（自らを驚馬としてへりくだってという語）。一生懸命、精一杯に努める。「——って努力します」（出典：新潮現代国語辞典、1985年第1版第1刷、2000年第2版第1刷発行）。

ii 『日露異色の群像30 ——文化・相互理解に尽くした人々』（2014年4月1日初版発行、責任編集：長塚英雄、企画（株）ロシアン・アーツ、発行所（株）東洋書店、全503頁）、264-279頁参照。

iii 「水源地」誌。

六期生の粕谷隆夫氏が発行人。編集長は粕谷氏の高校時代の友人（印刷会社出身）の横山峯雲氏（創刊号）、吉澤稔雄氏（第2号～）。校正担当は村野。3号からWeb版に移行。今、全号の内容をWebで閲覧可能。<https://suigenchicom.web.fc2.com/magazine.html> 年齢、性別、出身校、出身地、職業、国籍に限らず誰でも寄稿可能。俳句、短歌、詩、随筆・エッセイ、論文、小説、翻訳、写真、スケッチなど広く募集。壺井栄のロシア語訳作品も掲載（4、5号）。

iv 三期生の美水正一氏の職歴。氏のメール文（2023.10.15付）から（公表については本人の了承済み）。

「私は2019年7月まで、ロシア貿易の専門商社（大陸貿易株式会社）に45年3か月勤務しておりました。以下、自己紹介とこれまでの職歴をお知らせさせていただきます。

●1975年6月～1976年11月最初のモスクワ赴任、その後1981年9月から4年間はモスクワ駐在員として、1990年から3年半は駐在所長としてモスクワ勤務を経験いたしました。以上、モスクワ事務所長を含むロシア駐在の経験が3度（延べ8.5年）に加え、旧ソ連各地121回の出張（延べ日数1430日）を経験いたしました。●国内では化学プラント向けの予備品、更新設備の売り込みでウクライナ、ベラルーシを含む旧ソ連全域を巡回しました。又、製材合弁企業向けの案件では零下50度を超えるシベリアの自社合弁製材工場向けに木工・製材設備の輸出案件を担当いたしました。この他、自動車部品製造設備他産業機械、製材設備、建設機械、搬送機器から農産物プロジェクトまで多彩な経験を持ちます。●その間、所属するセクションも、輸入課、機械課、機械部第二課、機械営業本部・エンジニアリング部、原材料機器グループ、一般機械プラントグループ、機械技術グループ……など様々な機構で色々な方々と仕事をさせていただきました。●又、古い話で恐縮ですが、学生時代は札幌オリンピックのロシア語公式通訳としてアイスホッケーを担当しました。当時のソ連のスター選手のドーピングテストに立ち会ったことなどが思い出されます。」

v 『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』（編者：日本ロシア文学会、発行所：ナウカ（株）、2000（平12）年10月30日発行。日本ロシア文学会創立50周年記念。全453頁）、209-214頁参照。

